



スカートのA B C

Aは、青と白のチェックのスカートをはいている。軽い、フレアーなデザイン。だけど、今のAは、いざとなったらくるくるダンスを踊ることができる足と、それに合わせて気球のように広がることのできるスカートのポテンシャルをデスクの下にきゅっと押し込め、パソコンに向かい書類を作成している。パチパチパチパチと小さな音を絶えず指先から生み出しながら。古い型のパソコンには、以前このパソコンを使っていた誰かが貼ったらしいシールの跡が残っていて、目につくたび、一体全体何のシールが貼ってあったのか、Aは知りたくてたまらなくなる。時々、人差し指でシールの跡に触れてみる。Aがこの席に毎日座るようになる前に、ここに毎日座っていた誰かの余韻に触れてみるように。自分で塗ったピンク色の爪がきらっと光る。

Bは、花柄のスカートをはいている。隣の部署まで、クリアファイルに入れた書類を届けに行くところだ。切りたての髪が、耳の後ろをくすくすくすくする。Bが歩を進めると、スカートの上で、明るい色の花たちが野原で風に吹かれたように揺れる。黄、オレンジ、緑、ところどころに散った赤。去年、Bはこのスカートに一目惚れし、しかし同時にその値段にも落胆し、セールの時期まで残っているよう心の中で静かに祈った。その祈りは神に聞き届けられた。スカートは無事Bのものになり、季節を一周した今日、Bはこのスカートにはじめて足を通した。花たちと一緒にオフィスを移動しながら、Bはとてもいい気分だった。デスクの間を迷いなく前進していく、つるつるとしたページュのフラットシューズがきらっと光る。

文 ■ 松田青子

絵 ■ カンバラクニエ